

81-190

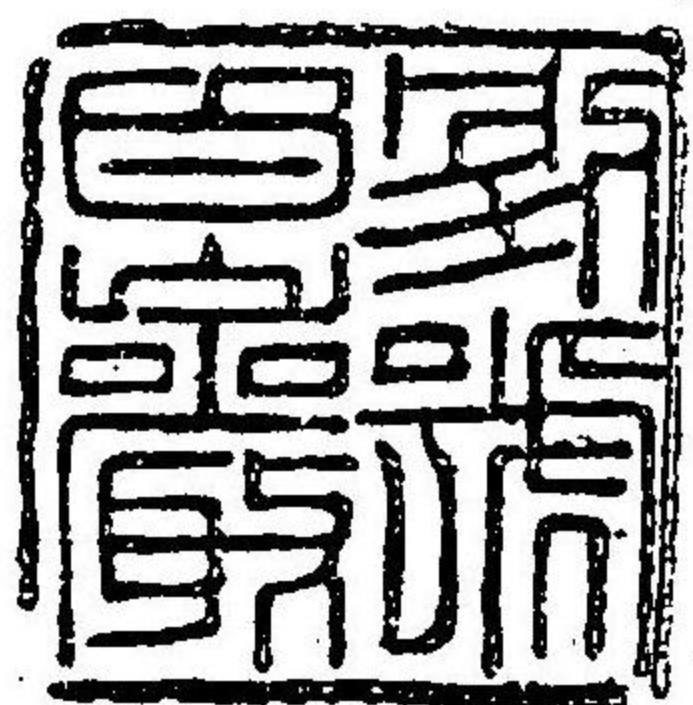


人

乃

海客

與林見人



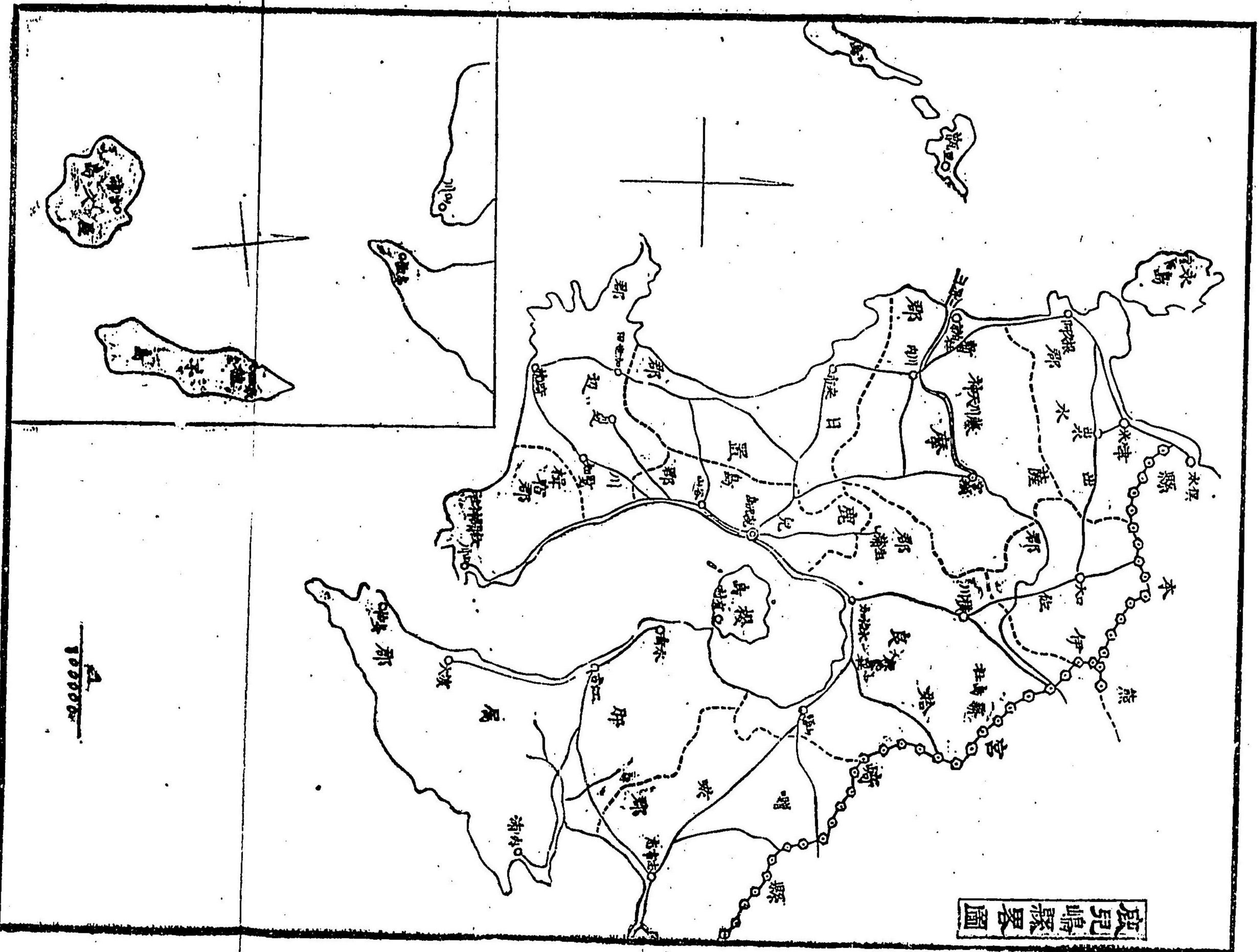
自序

一本書先令回鹿兒島市に於て開かる、九州沖繩八
縣聯合共進會の發機會と志す生か知友甘泉子
の切望に誘勸被受け生の淺學微才被以て事に當
る望且時日亦多き為再三再四辭退志多るに遂に
聞入是亦を強ての事亦是に止む亦を見聞を未志
在身被不顧先月の中頃と里筆被執里志亦里故に
時日の限里何る望加之見聞の是ら望る点と里書
中誤謬多志然是に尤尚是是被再版増補志に他日
寛に謝罪する處何里讀者幸に諒察愛讀の榮被賜
望、多幸多謝に不堪亦里之是被聊か自序と亦是

明治三十二年二月八日於鹿城旭通客舎

南 瀛 生 識

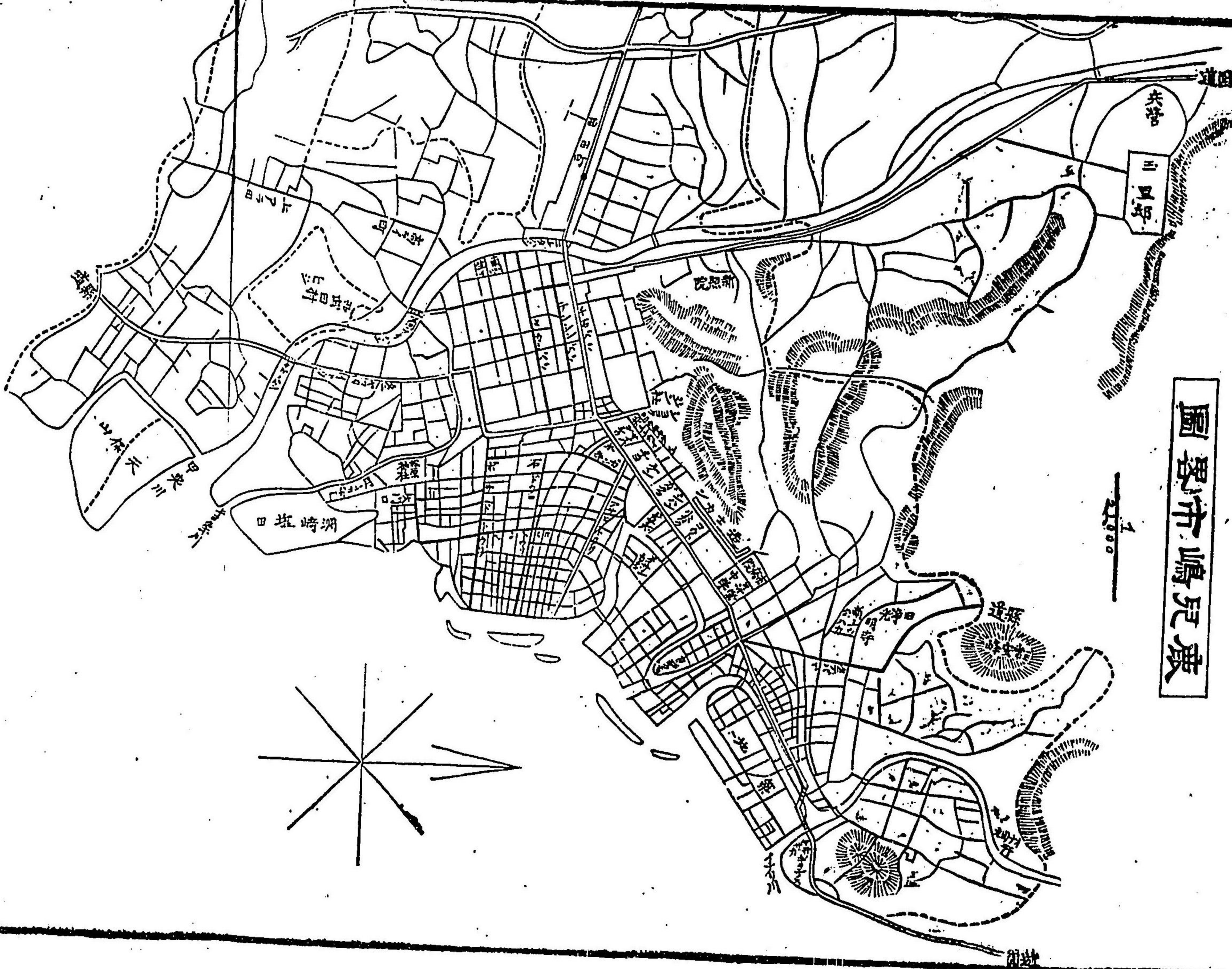
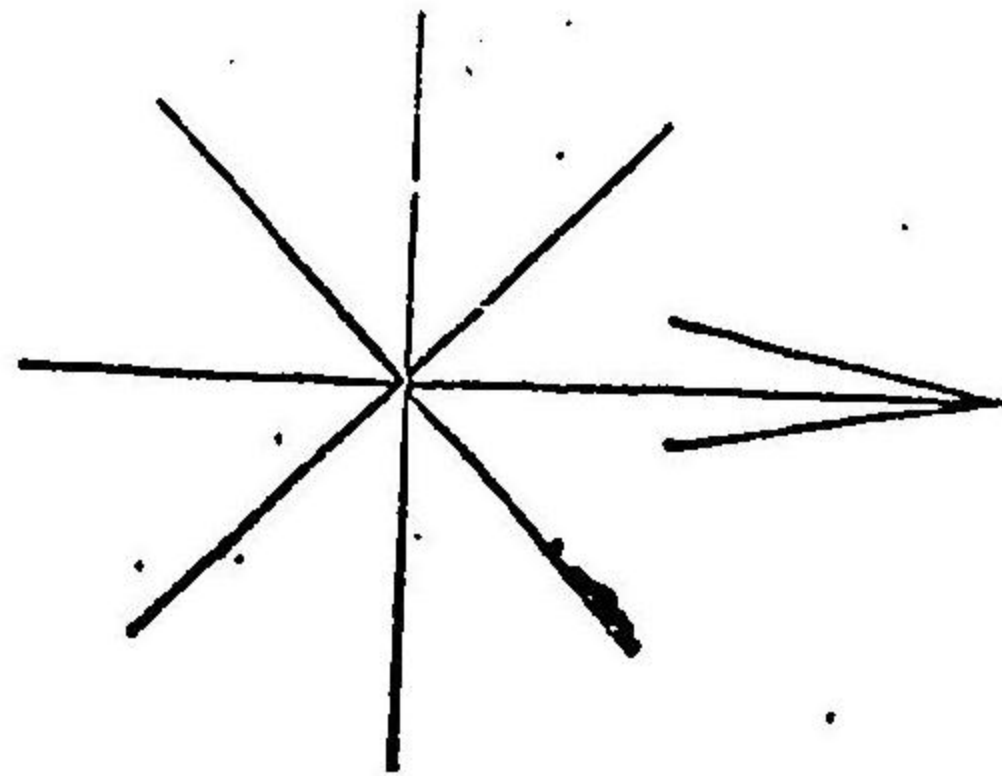
鹿兒島縣各圖



10000

鹿兒島市圖

1:25,000



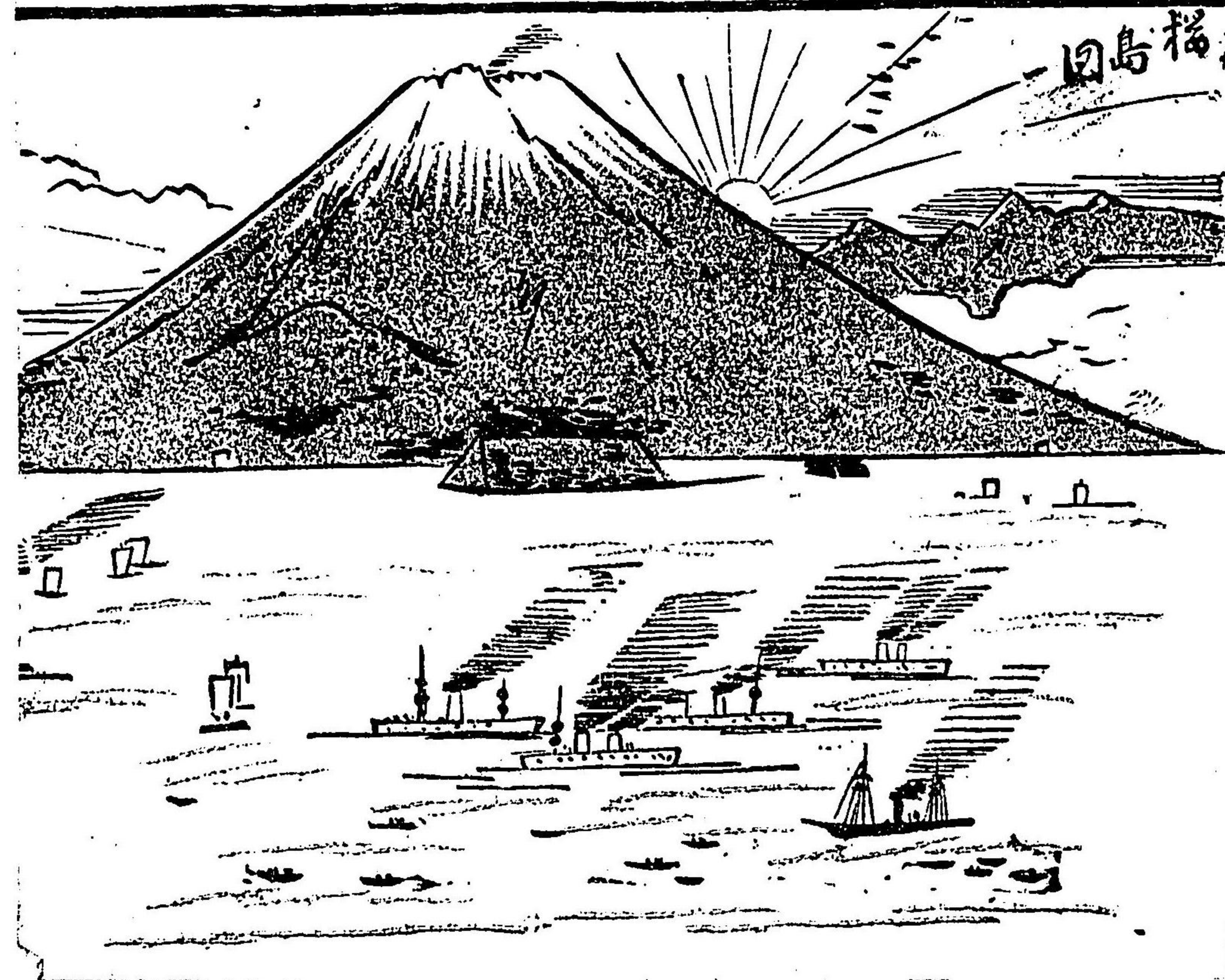
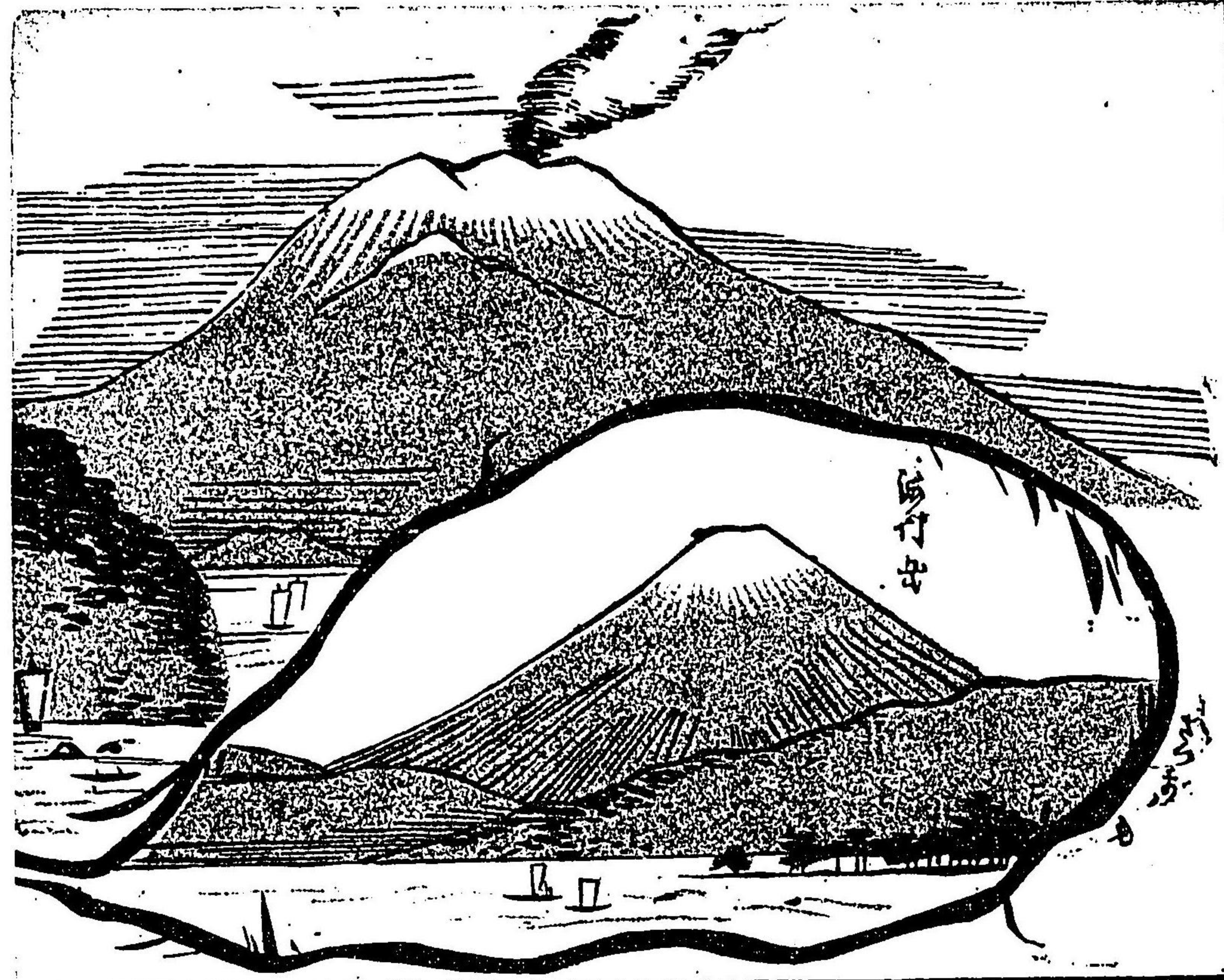
薩摩土産

土地

南瀛生稿

薩摩七九州に西南極端の國と云ふ山嶺起伏平坦なる所多からを然と云ふ
 亦深山幽谷人馬に到り得ぬと云ふ如た所少な故に國人を概して山嶺山
 腹を開墾す如となふ之を耕作するを常とせり
 山水の景色と全國共々天然の勝に富み殊に山に櫻島開闢を以て最
 も絶佳なりとて櫻島と鹿兒島灣前と屹立し其形富士に似て恰かも一大扇
 面を倒立して灣内の碧波を煽けるか如し開闢の嶽は額娃(郡名)の南端海濱
 に屹然とあて聳ゆる其風致圓錐を以て天空を突くが如く東西南北何れの方
 角より眺むるも更なる所なく殊に遠望し山容能く一見富士と誤るなら
 ん
 川の數亦少らむ就中川内川を以て最も大なる水源地日向より出で大
 隅薩摩を流る薩摩郡の川内を経て海に注ぐ其他山川多し雖も皆其長さ
 數里に過ぎず然とせも水底概ね岩石を以て水質透明清浄と云ふ魚遊塵石

一々數へ得べし殊々其流區多く山谷おそと斷崖絶壁左右を挟みて處々
 飛瀑をなま景色雅致の個所頗る多し曾木縣の瀑の如死其名著まきものあ
 り海濱の地亦其風景豊富京泊坊の津吹上の濱有明の浦磯は濱等雅勝明
 媚なること恐くも天下多らざるへま
 地質も細泥粉の如く何きも白砂様にして粘着力更にかま故に大雨等の節
 も山崩れ岩石の墜落少らも偶々修改せま道路等も土砂を流ま破損する
 個所多ま又山嶺等の樹木も多々斬伐まあまと降雨は度毎に濼ひ流まを數
 多の巨石山上山腹に露出せり
 石材の多死こと他國に其比類を見ま故に國內都鄙を論せま到る所墻壁
 代ゆるま皆石材を以て疊み井戸溝渠水溜手水鉢風呂箱等總て石まあらま
 るなま又道路等も他府縣に比し切石にて敷設まある所多し
 地層も多ま岩石にまて水質極めて宜し偶々井戸を得んと欲まま土中を
 掘るまも僅かま數尺ままて水脈に達す之を石まて周圍を敷き水の深ま
 漸ま三四尺許所謂角井或も箱水と稱し柄杓を以て汲む質も簡便なり冬氣
 ても水質温るままて他縣に井戸水の如死苦を覺はす夏氣も頗る冷かままて
 最も飲料に適せま一度に鹿兒島城下ま到る者は石燈籠通り海岸まて目の



當り此廣大なる箱水の設けあるを目標せん市中にも此種の箱水拾數個所あり
温泉場を國內處々湧出す泉質概して宜しく旅客を慰む諸種の病痾を治
するの効あり爲先は國人を其天恵を蒙るもの更なる多し個所を其數多しと
雖も櫻島、伊敷、市來、山川、指宿、伊作、種脇、入來、蘭幸田宮ノ城、出水、大口、菱刈、栗野
牧園、巖山、國分等の諸村を著名のものとし
諸嶺山亦多し鹿籠、芹ヶ野の金山及谷山の錫坑等頗る産出あり此の如し金
山の數多たる故に其附近の川流して沙金の流出夥しを故に之を拾ひ
て糊口とするもの多し各所より水車にて之を砕き採取を業とす

人物

我四拾有府縣八拾餘州中土地氣候の異なるに従ひて容貌風俗多少相違なき
又わらずに雖も本邦中著しく其異風あるも薩摩人なり本國の人として悉
く一様の容貌風姿をこぼらざるを概して之を評せし眉毛濃きを一直線と
して婦女子も亦灣形の度合少なを眼邊稍窪み眼丸を光は甚だ鋭きを總て物
を見るに瞳を一所寄せて之を直視を其慄慄の氣自ら現る顔も稍や瘦せ
たる如く顴骨出で身体毛髮多し鬚髮濃かき生へたり蓋し國人概し誕生後

額眉毛鬚髯首筋等更に剃らざるの奇風あるに因るか將た氣候の度より
 るか拾八九歳の男子をら美髯八字をなすもの少からる
 身幹亦長大なる人多く一見瘦せざる如き見ゆを之れ全く短衣短袴を
 着せるか故に於て其實裸體とありて見れども更に見ざるを瘦せざるもの
 少からる一休より身体強健にして骨太く胸厚を胸丸を兩肩一般に張りあり之
 を蓋し何等の原因あるか得て斷言す苦むと雖も多く其遊戯の腕力的な
 ると歩行より一種の異風あるに因るか兎も角挨拶起居の際態度より自から應
 揚かる点あり勉めて輕卒の風からあはむる如き
 然るを薩人の身体も健康と云ふより寧ろ強壯と云ふべし其外貌壯嚴
 筋骨逞しく激しき勞働に堪ゆるを拘らる体内の臟器案外に弱く健全無
 病の人稀かりを是を其當路者の談する所なり必竟此國に尙武の氣風頗る
 盛なるを以て衛生を理の道より更らざる願着せむ往々暴飲暴食々時等の時
 間分量に注意することなを或は度外の激動をなし或は坐臥あて動るを雨
 風寒暑に論なき其營生の節度を顧ざるか如く全く健康を害せるの原因な
 るへは故に種々なる病者天逝れ人多し
 世人も能く知るならん色の黒は薩摩人の特色なりを由來先天的黑色を



薩人歩りし圖



るく外去の圖

魔深やいおるし

免れざるへきと雖も多くも氣候の温度より又此國の習慣は山野田畑の耕作及旅行等をなまをも更らざる帽子笠頭巾「バツチ」等を用ひを常も身体を日光に晒せたるならん然れども商店等にて日常店頭に坐居るものは意外に色白れ者あり

時或は薩人の誇唱せる所を聞くに曰く全國中婦人れ多きと且つ皮膚の艶なるも京都鹿兒島の二なり此言真なるか如き男子も前も述べたるか如く壯嚴勇剛なるを拘らざる婦人も意外に優美なるも其容貌明眸齊齒淑酒たる相を有し豊満艶輝溫柔の風姿を持し男子ども全く其相反せること甚し然れども尙是を他府縣の婦女に比せし愛嬌と云はんとり寧ろ嚴も氣風見へ容止備たり肉色を都會の如く柳腰蒼顔れ美人稀なるも其強健なるも百事も無造作なる舉動恰かも男子に如く遠く他府縣婦人の及ぶる所なり

男子の服裝の如く衣裳は總て身幅狭く丈短きを常とせ殊も少年男兒も最も短衣を着し腕を肱まで足も臑までのものを着て彼の頼山陽の詩も形容もあらざる事實を寫さるるなり殊も田舎に至りて尤も此服裝の甚きもれあり獨り羽織は頗る長く殆んど衣服と同一の寸尺にして多し國産の

新を用ひ頭髮の如きも極短かき器械剪りて摘みたる儘襟筋等更にも剃ることなく眼光自然に異なりて骨達まを木履を稱する厚齒の下駄を穿ち肩を張りて歩行する風体實に豪壯なり

婦人の服装も從來大坂風に倣ひたりとこのことなるを當今悉く東京風をかま其風体の如く最も華美に於て門戸傾瓦牆壁破るゝの貧者と雖も外出の際も美麗に着飾りて生活の度と大に其趣を異にするもの多き去きとを斯の如くも主とて城下婦人の有様なを城外地地方に至りて概して質素古風のものたり又平常家居の際も更に幅帯を用ひる單に細紐或はスコギ等にて往復するを常態とせり

性行

薩摩人の浮朴質素にして事々臨み勇猛剛毅なるを一般其國人の特色あり言語動作の如き更に飾りなき彼の輕躁浮薄詐譎變幻濫り人を欺死不幸に陥る等れことと更に之れなればかり伴ふて人情頗る靜謐なをて訴訟沙汰其他苦情ケ間敷こととあらざる今其穩靜なる一例を擧げん村落學校等の如き時計其他諸器械等の退校後に至るも放置ありて當直番人にならざる嘗て盜難に罹りしことなき又通常民家にては常夜間の戸締りを爲すこと

せなれを偷盜に罹るの憂ひなく實に太平無事の天地あり故に偶々初て薩摩に至るの旅人を旅亭等にて意外の災害に逢ふこと甚だ稀なり

元來此の國の人々卒直淳朴なる反動の結果として細少の事を人々争ひんる理論を後々忽ち一場の腕力争闘をなすを常とせ故に若し他府縣人等れば此地に争ひんか事實の理否も更に頓着せし無我無人に全國人を加撻し甚きと群衆遂に殴打致死せしむる事珍あらざる今や都鄙共に教育及警察の制普及し稍や此惡弊を滅せしむ雖も亦争論腕力騒ぎの多きを實に遺憾と云ふへし

此國の人々單に殺伐粗豪のみ見ゆるとも其實内は自ら信切なをて優美の心情をも有せり若し人窮迫して一身を之に託せんか能く自身の勞働を厭ふべきを救援すること骨肉の父兄を管ならざるものあり故に古來幾多の敗將亡國の士を此國に寄せたる所以なり

男女間の愛情も亦頗る厚く婦女も能く柔順なをて夫に仕へ夫亦能く之を愛せ故に郊遊其他觀遊等に於けるも夫妻相携へて到るを常とせ其他の少壯に於けるも相愛を相信するの深きこと同一なをて若し知友縁者中より遠地に出發するものあらんか上を祝とて必ず縁者知友を招り送別の宴

を開け終日終夜會飲をなし或も互に金品を送り餞贈をなして其別をを
惜み一も其行を壯くするなど誠に感あるさよとなり

風儀

當今風儀の頽敗せたる天下一般の通患なり本國の如く又多少の衰替を來
ふありと雖も地理邊陲に屬せざるも他府縣の如く著しきものなれども然るも
近時道路の改修漸々整ひ伴ふて他府縣との交通愈開多諸種の人物相往來
る船舶の出入亦頻繁なるも同時に自然の結果とて風俗大に亂れ調味料
理屋等積々相起り醜業婦も益々出沒増加し名族の子女は修行世人は口頭
より紳士寡婦青年輩の品行は關し屢々新聞記事に現るゝを又名家は
子女もまた其筋の眼を晦まし密かに媚を與越の客を賣り何、あるを聞
て遺憾の至りたる社尙此國には女肝煎(女きまり)とて醜業婦等の媒介をな
し一夜の夢を聞かぬ先其花價の配當を貧り生活となせもの其數甚だ多
か如し畢竟此種は者も獨り密賣婦の媒介のみからず常は婚姻等の媒介を
る業とて其謝禮金を受けるを目的とせ此等のもの斯く一種の營業とせる
ものかきも偶々之を委託して妻妾を得るも亦得る所のをれば昨夜甲は婚
姻して今日復歸す明日乙は嫁せると云ふ如く其幾度論かく他家に迎へ

らる仕舞金(結納)

を騙取するものにて俗に所謂劍ぎ取りと稱する實に悪
むへに手段なり然れども此等には婦女は多し下等社會の人物もまた糊口
に困窮せるもの原因なるへ
薩人の性行も前記に記せたる如く無造作なる結果とて頗る奇異なもの
り凡そ人間一度結婚して二夫を見せると古今に金言なり苟くも婦女
子の他家に嫁せると婦は夫を補ふ夫は婦を愛さ如何に其艱難辛苦に境遇
に処するも其節操を變せず其愛情を毀たさるは是を人世の通則なり然る
も此國の人の如き風儀を重んずるも拘らざるも一家に風波の變起りて
遂に郷家へ復歸せると其當日當夜より其れ與行見物と或は何々遊散すと
更に時所を撰てす揚々外出をなす平氣に舉動ありて聊に世間を耻する處
なれが如き之れ此國人の果斷力と無造作なるも基因と雖も吾人の腦髓
も甚だ奇異に感あるものなり此等のこと概ね城下の有様にて城外地方
のものもあらざるあり
右等のこと風儀衰頽の最を甚だしむれば摘記したるものにて幾多の美風
美俗は今尙は存せざれども今日青年も矯風會なるものを各町各村に設け
て以て自國の良風を維持進長し勉め、われは自然に其衰頽の弊風を矯

正せるに至るなる可し

遊戯

士氣の最も盛なるは本邦中薩摩を措て他なき其平生遊戯の際を必ず豪壯快瀾勝敗の事を喜ぶ相撲の如く最も好む處なるとして通常の人と雖も大抵腕力あるなり故に神社祭典其他休息日ある時と地方の下男又と青年集りて相撲を取る殊に少しく賑やかなる例祭等ある時は所々村々よど力士集り盛に行ふ婦女子も亦好んで見物をなせり此多故に平素寒暑を論なき城下城外地方の兒童等まで裸体となりて相撲をなせり此珍なる其他「ハマ打」競走、立木打、競馬、弓術、擊劍、射的等皆好んで大人小兒のなす所なると頗る勇壯快活の遊戯と云ふ可し

「ハマ打」は拾數歳の少年集りて其員數を兩分し直徑寸余の厚さ三四分れ圓平に横切りたる木片を目的とし兩方の少年三四尺の棍棒にて打合ふかり其狀殆んど打球に似たり然れども一たび打損ふ時ととりて顔手足等も當りて負傷するおせわれども幼少は時とり能く熟練せらるるとり負傷等をなせ甚だ稀なり

競走も多く町外亦と海濱原野等なき此戲他府縣兒童中に往々

園の殺まは



見る所なるも本縣の如く少年及び青年間最を盛りに行はば城外にて殊に盛なり

立木打 多く冬季の遊戯を以て寒夜凛烈なる時福祿又は只薄着の儘かすを以て霽間より深夜に至り尙屈撓せず長時間の持続を大に尋ぶもれなり

競馬 城下にて春秋の二期共天保山にて執行せり馬匹も多く田舎を來り其數實に數百頭其催ある毎に見物人亦萬を以て數の競馬最終の際等に婦人財と稱し群集有志中より若干の金錢を募集し更らふ當日優勝馬匹を撰抜して競走せし其勝者錦製の財と募集の金圓を賞とて與ふるなど實に他府縣と稱する大競馬あり同馬場は廳下を距る拾三四丁の所として東南海濱に沿ひ前面は蒼波の上胡坐を占め櫻島を扣けて馬場の周圍を一帶松樹を充たし風光頗るをる

弓術 城下にて城山公園内及州崎等に營業場ありて市内紳士紳商等及青年輩も盛りに行はば營業者の繁榮知るべし城外地方にて大抵一字一個所或は二三個所を設けありて其競技を爲まこと頗る

盛なり

撃劔柔術 市内にて松山町廣馬場千石町等 其の道場を設るあり
て門弟の數亦頗る多し田舎にて武徳會及び尙武會等を設け壯年青
年間 最も盛を行はる

射的 は從來營業場を以ては別設けなく常 原野或は城山公園等
假場所を設け行ひ來るが三十一 年六月以降市内御着屋 開場せ
ると非常盛 行はる尙狩獵期間に多數は免許者を出ださ 等其盛か
ること推知せべなり

右に如く少壯は時より種々腕力の遊戯を爲し總て筋骨を養ふの風習なれ
ば本國人の腕力 富み且の豪毅れ氣象に壯きると決して怪む 足らざる
なり

言語

本邦中言語は解し難死て世人皆知るからん奥州及薩摩なりと余や薩摩に
在ること茲に閱年其初を第一に不便を感じ著しを閉口なるを實に言語
のわづら下海岸附近其他官吏學生等にありては稍意中の八九を滿せると
雖も若く深く内地に鄙郷に至りては教育なく且の土着を離れざる農人等

五木打の圖



と逐ひて種々の談話を試みたる其解を難たこと甚だ多かりし殊に婦人
對しては尙一層に困難を感じし例せば本年一月生や養病の爲先市來温
泉に至り徒然の餘同浴客の或る學生と共に知人を訪問する偶々側ら
る老婆あり之れは對談話を試みたる老婆は果然と云ふ其應答も苦み如
何の問を發するも「ハ」ソウデゴアンスヒと答へて遂に要領を得ざりしか
り斯の如くはせむ城外にて珍なるらざることにて本國語の他府縣を通
じ難きと同時に亦他府縣の通せざる所以なり茲に薩摩語の最も特殊なる
点を聊に左に列記せり

(一) 音辭大なる句調甚だ異なり

總て何事と談ずるも音辭大なる且句調の異なるを以て他府縣人比解
し難た点多かるべし若し始先薩摩に至るの人と其音調を馴らさざれば殆
んど洋語を聞くが如く感おらん殊に婦人にて尤も甚しく障外隔離して
日本婦人たることを知らず其言語のみ聞くときも恰も外國婦人の談話を
るならんと感ふるもの多かるべし然れども能く此音調を聴て訓れらるる
も随分解し易きと當初はも解し難たもの更らば多し

(二) 品詞の通常語と異なるものあり

不便を最も感ずるも品詞か概して事物の稱呼に甚だ相違ありて現る其物の眼前にありし時之れを指さる示せば其用を辨するも左かき場合等如全きく其用を辨せざるにあり加之動詞形容詞等其他も多々異なる点ありて殆んど解る難し

(三) 發音に訛音長短ありて分り難し

例として「ローソク」をドウソク 「ツノタイ」をチミテ 「如何ニシテモ」をイケンシテモ 用事をユジ 「人」をフト 「此」をコイ 「原」をハル 「樂」をダク 「立派」をヂツバ 「道理」をドウイ

(四) 語句多く短縮せるもれ

「灰」をヘ 「貝殻」をケガラ 「坐頭」をザツ 「燈籠」をツロ 「大根」をデゴン 「太イ」をフテ 「安藤殿」をアンツドン 「豌豆」をエンツ 「蛭貝」をシジメダ 「貝堀リ」をケホイ 「琉球人」をヂキワシ 「五左衛門」をゴゼエ 「庄吉」をシキチ 「宗吉」をシヨキチ 「此間」云フコトヲ 「キノオトテ」 「入ッテ居ル」をイツチヨル 「居リマセン」をオンサシ 「知リマセン」をシンサシ 「有ッテ」をアツド 「シヤッソウ」をシヤキンソオ

(五) 荒き言葉に内にも亦優美な言葉あり

「見テ御覽ナサイ」を見テミヤンシ 「仲間ニ入レテ下サレ」をカタラセテタモシシ 「私ニ下サラエカ」をアタイタモハンカ 「能ク御出ニナリマシタ」をニクソオシヤンシタ 「御話ニ御出デナサレ」をオ語りケリオシヤハンカ

右に如く種々言語に相違より薩摩人は諸事に於て受くる処の不便少らざる殊に教育上の如に甚だ大なり小學校生徒の如に年少なるも本國語の外知るべからぬ故偶々科程の讀書をなすも他國人なると一讀了解する等の如きことを薩摩にて一々之を自國語に譯して後説明するが如き師弟の間甚だ困難を覺ゆるものあり 教育家及有志輩は於て普通語の使用に盡力をもとめ表面上の贊成にて尙從來の感上の上より於て未だ一体之を悦ばずヨソモノ言葉として之を賤しむ偶々使用するものある時は生意氣とみて指彈せらるれど土着教育家生徒等を普通語を使用するは概ね教場内の儀式的として校外にて更に用ゆるを見聞せず然れども近時文華の進むに伴ひ日を重ね年を馳逐稱や其不便を感ずるが如し

大島よるも琉球薩摩國との中間語なるが如く實に一層甚しはものあり本
 縣中最も言語明瞭なれど能く普通通用するも種子島島言語なりと必然
 れども句音を幾分詭を有るを免れざるなり

稱呼

「御前様」をオハヤ 「御前様」(少し目) オマンナマ 「汝」ワイ 「汝」
 ワツコ 「彼を」エシ 「彼を」アイ 「我」アタイ 「我がが」オイガ
 「我共が」オイドンカ 「彼共」アイドン 「汝等」ワイドン 「御前達」
 オハンダチ 「皆女の衆」ミナンシユウ 「老人」オンデヨ 「壯年」
 オセ 「青年」ニセ 「少年」チゴ 「妻君」オカタ 「御内儀」オチギ
 「奥様」コジユサン 「若旦那様」チゴサン 「お嬢様」オゴイサン
 「見女」オゴジョ 「下男」ゲニシ 「下男」デクワン 「下女」メロ
 「夫婦」ミニト 「僧侶」ゴズ 「通俗僧侶」ボズゲイ 「神官殿」
 ホイドン 「密淫賣」ハイタコ 「穢多」パンダ 「穢多」チヨリンボ

應答

「長上の」ハイ 「互のものを又も」ヨ 「子弟に対する返詞又」オー
 「返詞」ハイ 「目下返詞」ヨ 田舎でも親兄弟も用也 「オー」
 「オイの」ホツヂヤン 「ソウダ」ヂヤッヂヤー 「ソウジャツタガ」

「チヤツタガ」 「ソウダツタガ」 「ソウワヤケレドモ」
 「ソウシヤドンカラバ」 「ソウ仰シヤルナ」 「ソゲンギヤン」
 「御目ニ應リマシヨウ」 「メアゲンソ」 「御免クダサイ」 「ゴメンナシ」
 「御出デリアリマス」 「オジヤン」 「御出デリアリマス」
 「オジヤン」 「御出デナサイマセンカ」 「オジヤハンカ」 「御出」
 「ナリマシタナ」 「オサイジヤン」 「御出デクダサイ」 「オジツチ」
 「タモンシ」 「罷リマスガ」 「マカンスガ」 「よい天気であらう」
 「ヨカテンキゴアス」 「左様」 「アツデー」 「とい晩である」 「ヨカヨノイ」
 「モデゴアンス」 「御病氣でもありませんか」 「オダレハンヤハンカ」
 「御話シナサイマセ」 「オカタリヤハンカ」 「よう御坐いますし」
 「ユグザンソウ」 「まゝ参りまゐらう」 「マタメイアゲモンガ」
 「まゝ來ませ」 「マタクツガ」

物名

「鐵瓶」カナヂヨカ 「土瓶」チヨカ 「急須」チヤジヨカ 「茶盆」
 オシオケボン 「箸」テモト 「手桶」タメゴ 「手籠」テモ 「俎」
 キイバン 「俎」マチタ 「錐」イリ 「シヤツ」サツ 「洋燈」ダンブ

「洋傘」ダンカサ 「竹皮笠」タカシバチ 「味噌」オコウ 「酢」アマン
「團子」ダゴ 「蕎麥」ソマ 「蛙」ビキ 「蝦蟆」ドンコ 「龜」
クヅ 「田螺」タビナ 「狸」ダンザ 「針」ハイ 「芋繩」ヨマ 「朱墨」
シウ 「書物」ソモツ 「柄杓」クシヤク

形容詞

「細S」ホソカ 「細さS」チンカ 「細さか」チンカ 「善S」ヨカ
「悪S」ワルカ 「高S」タカカ 「低S」ヒクカカ 「汚S」キツカ
「黄S」キカ 「白S」シトカ 「青S」アオカ 「新S」ニイカ
「熱S」アタイ 「沸S」タギツタ 「澤山」ツマアツ 「澤山」ツン
ハイ 「澤山」ワザイシヨ 「恐ろしい程」コトロシイ 「恐ろしS」
オゼイカ 「皆S」スツバイ 「余程又も丁度と云ふ時」ガツツイ 「面白
ひ」オモシテ 「彼方此方歩ひて大變疲ました」イツペコツメサロキモシタヤスツ
タイダレモシタ

大津繪節

鹿兒島で名物も早々目よりく櫻島上先ヒと遠ばらをのせ頭のあはな
い谷山の女のさかあうり新照院の馬のまらこん先餅武のろバ水のう
まさまよよ水蓋屋をせおさんかさげ重てやつてきた小よせも唐半
あを附揚るなぼこたねとせぬ

シヨン 節

あよんがババヒよも焼もちすたでよんべ九つ今朝七つよべの九つぢ
や食傷とせぬと今朝の七つで食傷あま
右の如き言語に多々の相違ありて他府縣人との間には頗る不便を感ずと
雖も淨瑠璃祭文芝居の言葉等に至りて更らば解せざるものあきが如し
而して歌の種類等も極たま多たが内々大抵青年輩の歌ふ所は稚兒歌、琵琶
歌あり詩吟もるものも甚だ少なし賤卑のもの共と卑した俗歌を行とる
を概して一般の流行歌あり

稚兒歌

稚兒故も今朝の出ふねのまかくを人あをしらぬ陸を行をるな
稚兒様は高き所の櫻花手はどいかねとせひよ一枝

琵琶歌

武蔵野の草とあふく多けれとつみなすをばさても少く皆人と若き
時より只いふづらふ日を暮も才智藝能かた人と賣の山入里ながら

空しく歸るが如くあり偶ましく此世より生まれ来て眞如の玉を磨すと人
と生を甲斐もなし人よと淺く思はれて只いぬの老いなる如きよ
て朽ち果つるこそ無念なり又い何の世のいつの時よかみかくべした
のほきん世もあるかつたねづみさわぐ草葉の露の身かきとを假令
高位長者は身ななりて七珍万寶みまて築果にはこる樂を一夜の夢
れ如きあり歡樂極はまで哀情多しと古人はふみよしるさるゝさきバ
こそ生々世々の樂みも心の内は月や花之を樂む人もなき會者定理
盛者必滅の世のならい春去り秋を蟬は聲さてもそがなき浮世か引
寄せて結べば草はいはりよて解きばもやの野原ありすこさきを足れ
りとも知を満せば月も程なく十六夜の空や人れ身のうらゑも知らされ
り

士族平民

薩摩にては士族二種の別あり一は城下士族と外城士族とは是より元來城
下士族を其制他藩は城下士族と同一にして藩主の直接支配を受け制定の
扶持米屋敷を與へ文武兩道専ら勉めたる皆鹿兒島城下に住居せし其數
殆んど万戸に近し斯く多くの士族一城の下にありて屋敷等も流石に規模

私家酒
宴の図



狂歌酒
宴の図



宏大を極め煩る堂々たるものにて氣象容貌教育等も他は外城士族と比ぶ
て大差ありしと云ふ然れども廢藩後は士族零落して家屋敷を賣却し他
郷居る或は官を帯びて他府縣に轉住せしものありてなめ今日まで各
所は空地を生かす武士屋敷の舊形を存せしもの少し
外城士族も藩主は陪臣あり屯田兵の制も似て屋敷の外山野土地を與へ之
を耕みて生活せしあたり半農半士の故なることり城下士族もりて田
舎武士として痛く蔑視せられ非常の厭制を受る若し途中に逢ふて少く
無禮をば斬捨御免と云ふの有様なり俗に之れを紙一枚と稱ふ一枚の
扇書を出せば事済みなりと云ふ素より其風体言語等之を城下士族と比ぶ
るは鄙野かきと其質素朴直なるを勇壯の氣風あるも亦大に見るべしな
る例せば城下士族も舊藩の旗本に似て高尚優美な色とも外城士族は之を
に比して煩る田舎先き武骨らと云ふに然るも外城士族も自ら土地
を耕みて生活し道を立て居りし甲斐ありて廢藩は今日にも更らぬ城下
士族は如く其影響を處少く依然として其舊宅に安んじ内にも下男下女を
置たり牛馬養豚養鶏養蠶等も獎勵し土藏あり物置あり隠宅あり浴場あり
下人部屋ありて納米數百俵に至り食餘は賣りて貯金とかし從來蔑視せら

をし半農半士の耻辱を今と却つて幸福とあり其生活の城下士族を勝ると
 と甚だ大なり斯る故を以て故に今日まで此兩種の士族の均勢次第は相
 近づき甲抜け乙救ふと云ふが如き高低相平均は二族共一様の運動を行
 ひつゝあるに至り
 然るに翻つて平民社會は状態を見るに實に憐む可なりにして鹿兒島市
 等の如く僅少なる一部の商人の外更に財産もなく智識もなく勢力もなし
 士族との間を甚だ懸隔ありて容易に混和を可くをわらず然るに薩摩
 置縣とありてより已に三十年戸籍上士族平民は區別こそあるに權利義務は
 上は於て何んぞ異なるの理なれども拘らば獨り薩摩にても其懸隔は今尚ほ依
 然ある封建時代の天地の如し
 一は西南地方に於ては士族の勢力盛なり殊に薩摩に最も甚なりれども
 仮令と公共事業其他何事と限らば諸官衙諸役所及諸會社員其他小役人
 に至る迄九分通り皆士族を以て充たせるもれども其威勢は盛なることを恐く
 と全國中他の比類を見ざる処なり是れ從來の士族權勢の度脱脚せざる
 必竟するなるべし

農 産 物

薩摩に前を略述へたるが如く國內大抵山岳にして僅かに山間山谷等
 少々竹の水田を墾けるのみかき大凡一方里に付き田は面積は一、
 町九許に於て其土地の廣表を比し至つて少なるれども山嶺概ね平坦なれ
 ば之を畑に開墾せし個所多く意外に其面積を有せり即ち一方里に就て二
 七五町六許あり
 米穀の收穫等を全國中にて最も低位にあり然れども土地より米麥一
 地二作のものありは兩者相合をば其間多少の收穫ありと雖も未だ充分
 改良進歩に就かざるに相當の收穫と云ふに足らざるなり粟と國人概して
 常食とされば其收穫稍多と雖も亦總額の如きと尙土地と伴とざるあり
 其他蕎麥作等の多き恐くは他府縣に劣らざるを收穫高の如き全國統計上
 十二三番あり甘藷作と流石原産國丈けありて我國中第一位にあるを其
 收穫は点に至つては全國總額中八分一に足らざる如く作附多くして收
 穫と相伴とさるるに必竟此國の風弊とて何等れ作ても肥料培養に注意
 せし只天然に委ねるもの其原因なるべし然るに近時世の進歩と共に
 地方當局者の大に勸誘する處ありて農産上其れ々有益に結會社團等を設
 け切りに改良進歩に勉めつゝ、あきば月を重ね年を隠はせ大に其面目

を改むるなをへし

今重なる此國の物産の擧ぐる左の如し

- 砂糖 材木 煙草 陶器 竹細工 錫器 織物 柑橘
- 鏝節 牛馬 石材 櫻島胡蘿蔔 金銀 硫黄 甘藷

掃花集 免

正月 大休の儀式他府縣に異なる処なし元來薩人は文事風流を好まざり
 詩歌書初歌かるた等れ慰み稀なり男子は何れも「マリ」打「ハ」擲け
 「カステラ」打等をなし女子は毬を弄ぶ等より其他概して終日會飲ま
 るなり

七日の夜に爆竹とて此遊戯あり之を正月用の門松割木を貰ひ集光
 て薪となし其火焰を青竹を焼り竹の節に籠る空気を膨脹せしめ石
 を打ち當り、爆烈せしむ此戯も多々街頭街後より爲して終夜絶えず其
 爆發の響き恰かも砲聲を聞えが如き古來支那より傳來の風習なりと
 云ふ

二月 初市とて城下にては照國神社前の馬場にて雛人形市あり人出隨
 分多く商賣亦盛なり

三月 樹市とて鹿兒島新聞社近傍廣口にて立てるもれにて諸種の樹木
 を白根の儘賣買するなり購客頗る多し

此國は此月中花見或は野遊と云ひて一般に野邊をなま場所も多々原
 野海濱等ありて親族縁者朋友等を集光管絃絲竹を弄ぶ酒肴を開
 け終日愉快を盡し呑み騒ぐなり

尙此月とて武士婦女子の手なまをる押書及金助毬とて徑數寸及尺餘な
 る種々の縫ある大毬を夜間呼賣をなま舊慣あり呼賣者は多々武士の
 女にして貧富を論せま此業に従事するあり其状態を別圖に示せる如
 く時に下女を伴ひ押書「ソイ」金助「マイマイ」と音聲を揚げて呼賣り歩
 むれ状如何も奇なり

四月 城下城外にて佛發最も盛なり此月とて各海濱にて婦女子美裝し
 濱に浴を遊遊し駆け廻りて貝堀りをなま之れを櫻貝堀と云へり

五月 節句初職祝等更異なる処なま五月と太田參りと稱して各組或は
 各字より講参りと云ひて嘯喚郡國分村に鎮坐の八幡神社に幾千に參
 詣者あり其紛裝の如き陸に至るものと職旗を押立て隊をなまて進行
 海上より至れるものは船頭より一の幟を立て乗組光る幾多のもの

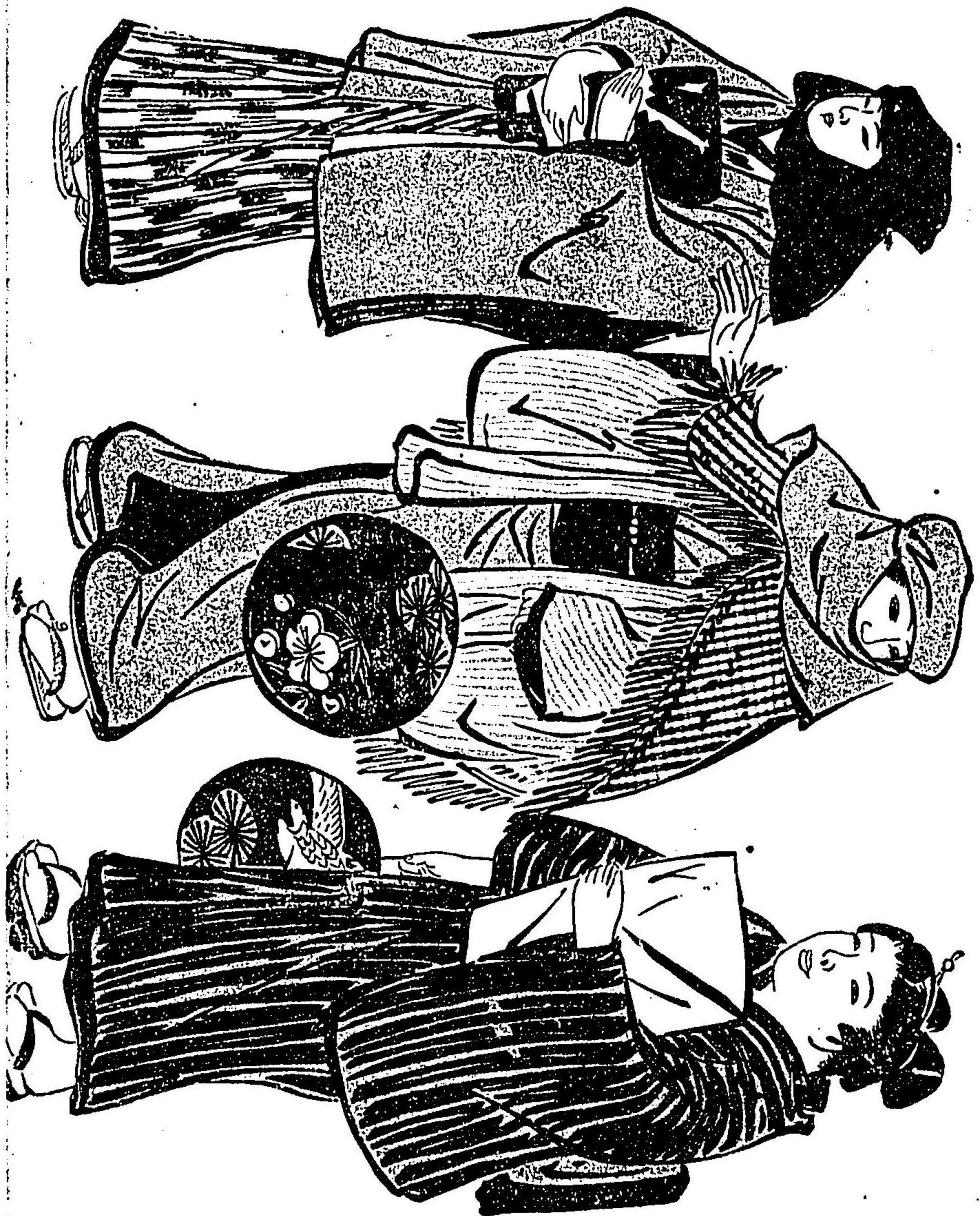
異様なる音聲を發して一種の歌を歌ひて行けるの様恰も海陸軍の進
行せるが如き實に勇爽壯觀あり
尙此月廿八日夜傘焼れど市中或は村落まで貫ひ集はし古傘を焼れ
捨つるなり此戯を概して街頭の積りてなほ盛に大の手の上るを喜ぶ
古の會我夜討の當時大雨ありし故其古記を形どりて爲すものなりと
云ふ

六月

七月中祭禮あり如何なる小神社と雖も必ず六月燈として終日終夜祭
禮あり祭日よ其方限り一戸二三張り乃至五六張りの燈を吊し又
道々辻辻にその大なる角燈を種々俳句又武者繪を畫けるものを
点ちて實に盛に祭禮せるあり此夜は人出も頗る多し幾多群集し肩
相接ふ土を踏はまして歩行せるよと珍まからざるなり
十六日夜は十六夜の立待ちとして拾六才に相當の男女も幾百金を費し
て新調せる衣服を着け海岸に出で月の上るを待ち拜せるなり此由來
良家良縁を求むためなりと云ふ

十五十六の両日に祇園祭として種々飾り立ふる山車出て太鼓三味線
鐘等譜を合せ賑かき囃し立て二頭或は三頭の牡牛にて市中各所を引

加繪賣力圖



廻さし車上より美麗な衣裳を着けたる八九歳乃至十二三歳の兒女を
乗せ盛んに舞技を演ずるものゝ頗る壯觀あり

七月 七日の七夕祭も男も色紙の短冊に種々の歌を書き婦女子も衣裳
の形を色紙又は綺切にて製す之を青葉の竹に垂し門前屋後に立つ
ること他府縣と更らざる異なり

盆祭中と新盆に當る家にては數拾張の千草花紋を畫するいと麗きに
灯籠を毎夜墓所に吊し殊に十五日夜は薄暮より酒肴を整へ親族知人
を招いて墓所に通飲するなり

十六日夜は多量舟遊あり午後より早酒肴を用意し舟中酒宴を設
けて三味太鼓にて非常な騒ぎ立て幾十の遊船と船頭も數拾の球燈を
点し其影波上より映じ涼風波を送りて金紋を織るが如き岸頭には幾千
の見物人群集する等頗る賑かあり

八月 は十五夜の綱引とて晝間八九才乃至拾二三歳の少女藤蔭蔭にて
綱を引合ふる中央徑尺餘兩端稍小なる長數拾間許の大綱を市中各所を引
廻す夜間に至れば町内の若者等にて町或は組は東西上下と區分は大
綱を引合ふる薩人元より勝敗事を好み殊に此遊戯は口牌を傳ふる

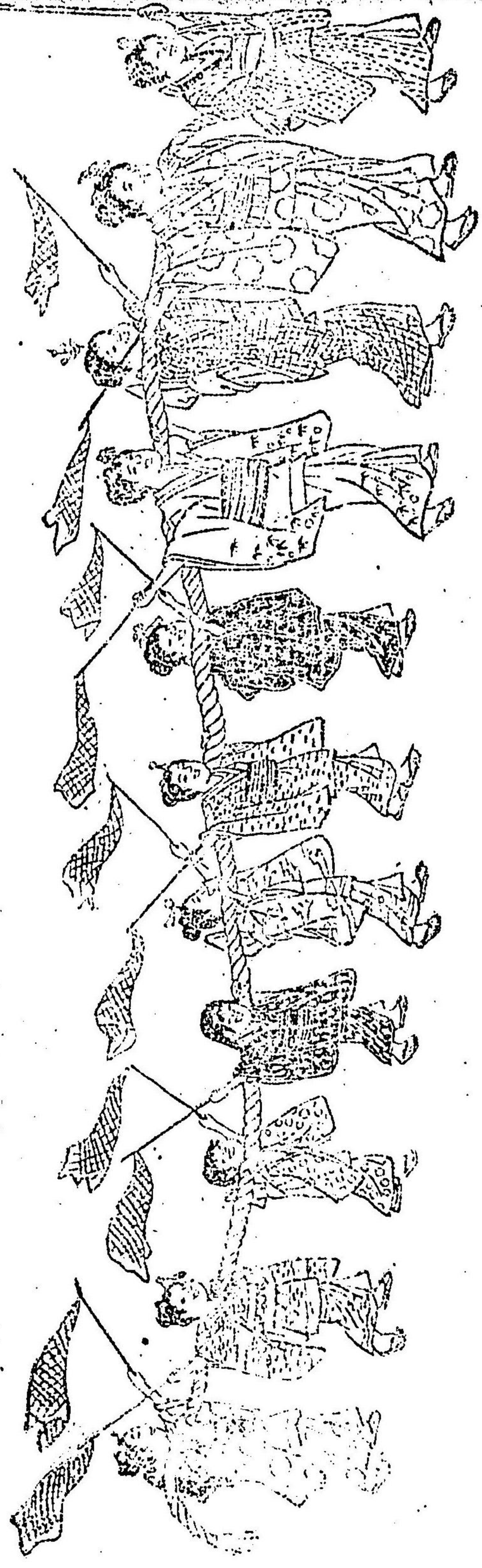
勝者は商賈耕作仕合よく敗者も甚だ不吉ありと故に互に其方限り
より老弱男女を問はず引合の加勢するものにて頗る面白く勇壯の遊
戯なり尙書問兒女の綱を引廻す時柏子歌ありいと面白きを左に記
せり

九月

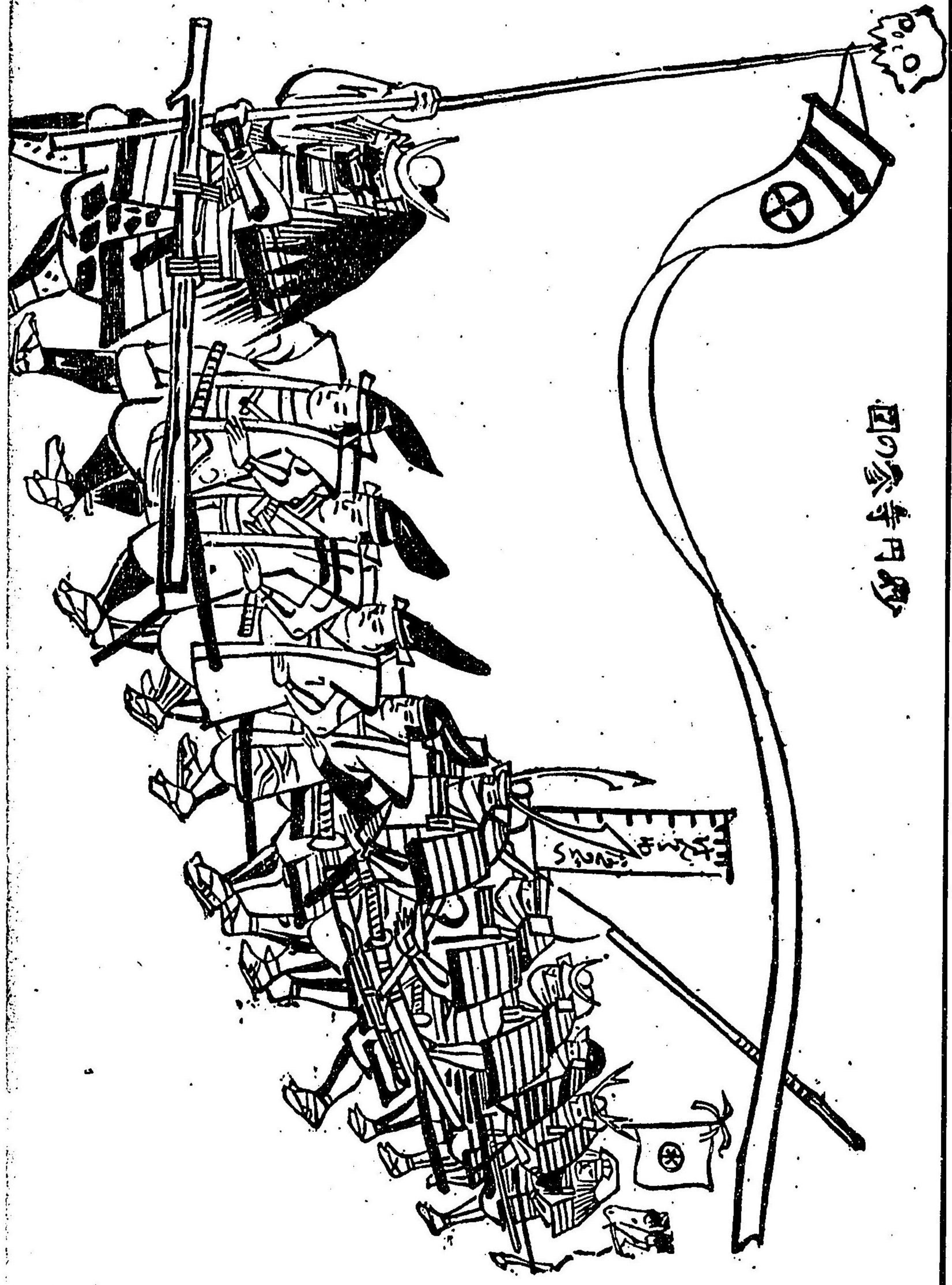
ヨイ、オ月サンマツイアグル、子供ダマシテ綱ヲヒクエツツサク
各神社の方祭として（方限りの祭り故）大小は神社に論まき必ず祭禮を
執行此祭典も其神社に組下各軒頭は何をも舊藩主に定款を附ま
る二三張の灯笼を点せるを其光景頗る賑としを城下にては夜間
最も人出多き然るを此國にては各神社に祭禮も他府縣に如く神
輿の出づる更ら稀なり
十三日七日置郡伊集院村に鎮坐の妙円寺にて幾万の青年男女各
町各村上を隊をなして相聯り甲冑を着る或は烏帽子陣羽織にて大刀
を帯び旗幟を立て貝を吹た太鼓を鳴らし參詣するあり其他のをれも
概して異様の装束にて多く武者風のものたり全日何をも此風体を
て夜間より進行し全夜全寺に徹して翌十四日午前に至りて飯を常
とす此由來を聞き昔島津義弘の關ヶ原に戦ひたるを紀念として此

八月十五之夜圖





八月十五日國公團



妙月寺の團

慣例をなせし由其狀頗る奇觀なり

十月 城下にて伊敷村なる鹿兒島神社の祭例あり頗る人出も多し又神

輿の前後より甲冑及烏帽子直衣等を着せるもの供廻をなす鎗、短刀等

は道具立てて同社と州崎海岸に降りて神輿を海中に飛び入る其狀

勇爽なり之を地方にては濱降りと稱えいを賑とし

十一月 此月内にて照國神社前馬場(順聖院馬場と云ふ)にて例年古道具市を設け此國は

古器物及古道具等を鬻ぐ人出も頗る多し商賣亦盛なり

十二月 二十四日にて市内及城外にて各組又各方向にて青年相集

り義士傳會なるものあり昔赤穂義士復讐の夜を紀念とて同夜格好の

場所を撰みて義臣傳の論議をさせるもれにて假令深更に至るも尙ほ

冊を擧へざれば夜を徹せ止まざるもれなり又集會者も各團樂して能

く傾聴し書中要部に至れば聴衆一齊に「チエースト」を絶叫し頗る勇壯

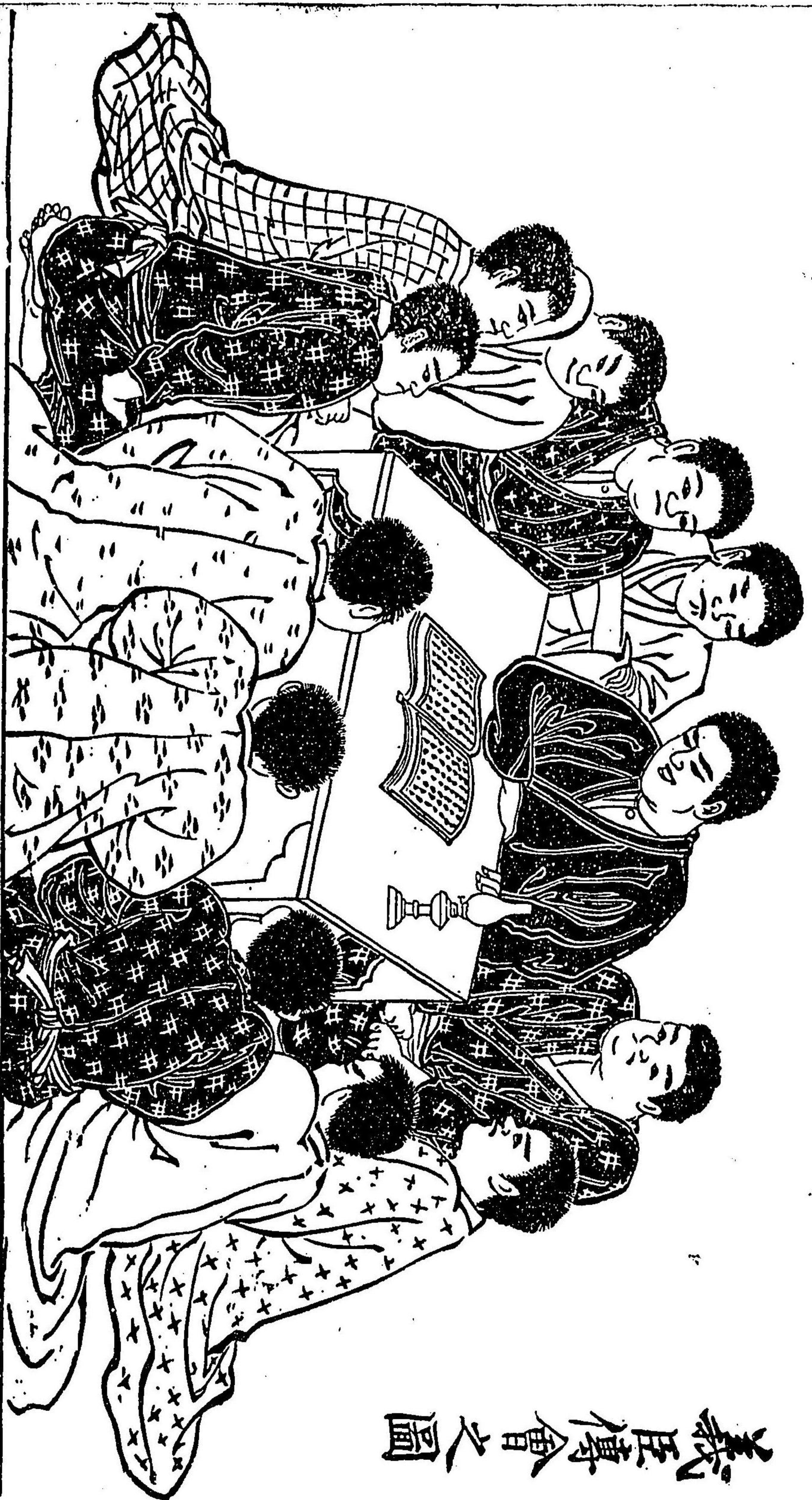
奇觀なり斯るゝる敵愾心を少壯の時とて自然に養成するの習慣あれ

ば畢竟此國人の事と臨み剛毅にして義烈と感え易き所以のもの蓋し

故あるなり

歌 舞

親しく薩人に接しゑるもれば能く知るなるへし此國人も無骨殺風景の如
 き見ゆれども其實然らず頗る多藝多技なり又甚だ嚴肅の様見ゆども實
 は意外に滑稽諧謔を好み興到れば勿ち歌ひ勿ち舞ひ歌舞音曲を好むこと
 著しを神佛祭禮或て祝事親睦會送迎會等の節は勿論其他の酒宴年中絶ゆ
 ることなく實に愉快の日を送るなり尙此國も其様の習慣あり假令バ祝
 宴或て私宴に隆盛な雖も立てんか家前屋後論なき幾多の人群集ふ甚し
 きも屋内に詰り込みて見物中とて或て歌ひ或て酒宴に席を舞ひ込むかど
 實に奇異のものなり一体に此の如き廉ある酒宴其他に私宴等の論なく無
 造作なること頗る意外に多し又平常の宴會等もて會飲中老弱男女
 を云とす裸体となりて宴席に踊るに姿實に抱腹絶倒れものあり殊に踊り
 の目立つもの老嫗などれをれに在り此等のものと雖も興到せば眞赤裸
 となりて諧謔は舞踏を演ずるあり
 尙祭典祝日等ある時は組の若者どもなれる太鼓踊り棒躍りとして他府縣
 より稀なる躍りあり太鼓踊りも由來朝鮮征伐に勝ちて凱旋の節祝ひて迎へ
 踊りたるより起源を其状態甲冑を着け弓矢を負ひ大刀を佩びて背よこ
 獸皮を着る長さ竿も羽毛を百合葉様も附け竹皮笠に種々花紋を張り附き



義臣傳會之圖



棒踊
白

たるをれを冠り數十人一組とかり鐘を打多太鼓を鳴ら或は數列とあり
或は一列となり或は急歩し或は緩歩し或は一所に立止ま或は周圍を廻
り走る等級に打方れ緩急に隨ひて或は列を崩し入り亂れ混交して敵味方
れ差別なき合圍亂闘するが如く歌曲到るは亂伍漸く解けて舊形に復し列
伍整々あるに狀實に壯觀と云ふべし
棒踊り若者數人にて一組をなす種々色どりある切きを以て鉢巻及襟をな
し一様に衣服を着る五六尺の棒を持ち合ひつ離れつ種々變化し掛聲を
なし打合ひて舞ふ其狀恰も華劍の如き亦珍らした踊りなり此等の者は祭日
祝日等にて數里に処を行列或は組をなして途中打つ、往復するなり

宴會

凡そ薩人の宴會を開く時必ず自家製造の焼酎及自家調理の肴を以てす
誠無造作なることあり酒宴の先肴屋料理屋等と委するものも他府縣
に催さるるの宴會と異らざるを更らざる面白き國人一般に催さるるの質素の
宴會なり此等は大抵會費を要するところあり場所の如く多く原野海濱或は
小高き丘陵等に芝生を以て席となし酒肴は自家製れもれを竹筒又ち重
詰り適宜の分量を納めて各會場を集り彼處此處に團樂して持參の酒宴を

開き互に笑談して献酬し酔到るを著賦或て琵琶歌俗歌等を歌ひて各舞踊

をなし盛に愉快を盡して散會するなり

飲食物の如くも極めて淡泊なり假令中等以上の生活をあまれば人と雖も概

して粟或て甘藷等を合せて炊きもれ多し中等以下のものに至りては一般

甘藷を常食とし皆一様な味噌汁を用ひ醬油汁を用ゆるを更らば稀なり野

菜類は一体乏しくイトウリ(マヘチ)オヤシ(大豆小豆等)苜蓿類唐瓜及瓜等を以

て汁に實とあまが如し魚類は河海産とも豊富なり海には鯛、鱒、鱈、鰯、鰯、鰯、鰯、鳥

賊、鰻の類尤も多く河には鰻、鯉、鯽、鮎、鰻等にて四時之色を用ゆ大抵國人生

魚を食するに必ず酢を混和して食するなり若し醬油れみよて酢の混和

なれどささ之を食せざるをれ多し

一般飲食物も自家製なり味噌、焼酎、醬油、味噌類皆自家にて之を求むるも

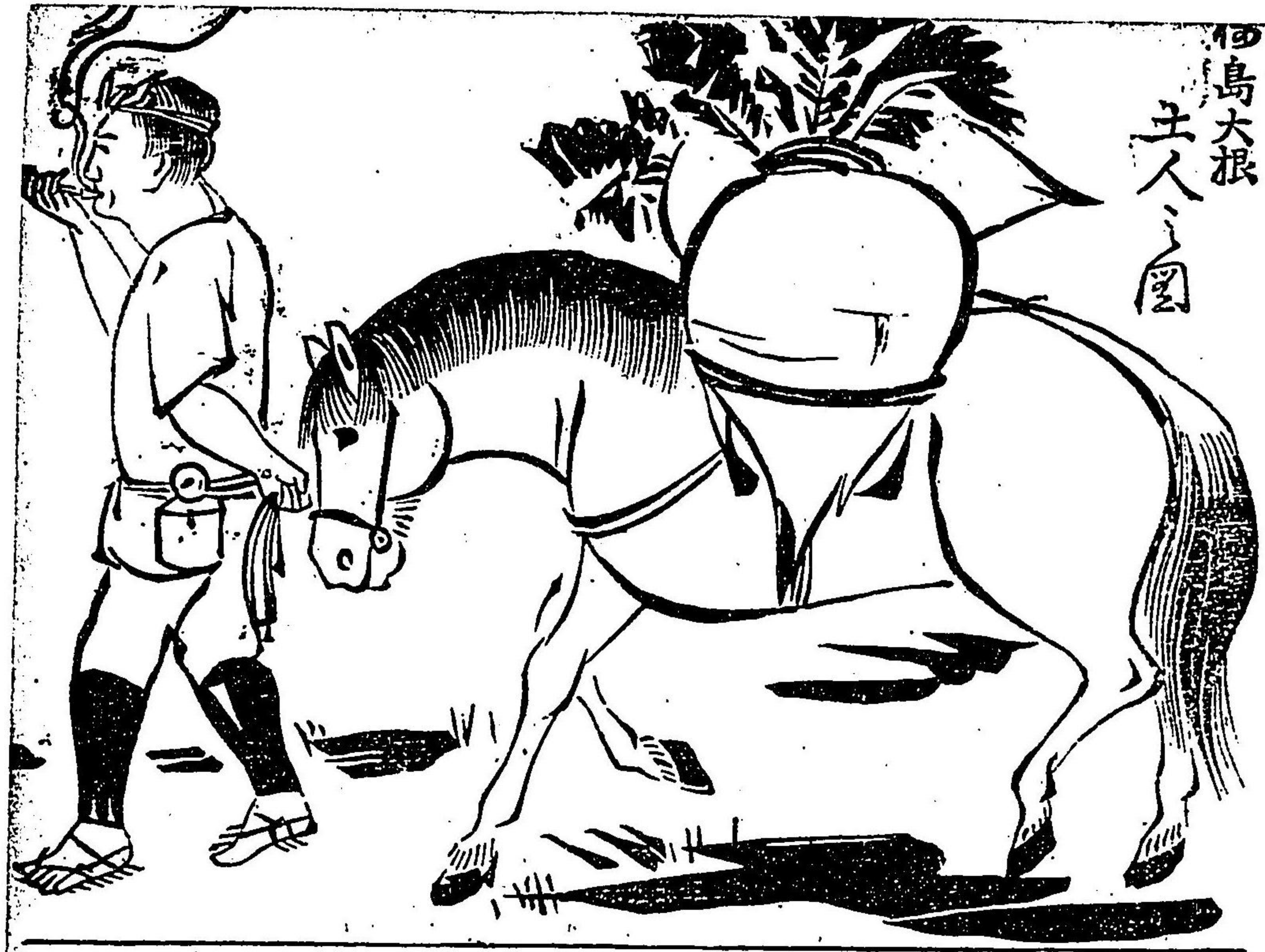
甚だ稀なり味噌、麥にて製し、醬油類も味甚だ宜し此等れ飲食物を製造

するに陸人頗る得意なり

人を養ふるに多く自家製にて料理等れこと至つて手早く調理す

訓を客到るに暫時の間、辨し男子も大抵料理法を知らざるをれ少

なし味は稍や塩辛に方にて鶏、豚、猪、鹿等概して骨まで打切し鹿猪の如くも



仙島大根
主人の圖



全崎お人の圖

皮目と稱して少くも毛は附いたるを賞玩し青年輩會飲は際は鍋釜と團樂
あて各箸を持ち直さ喰をなまかり此等れ風を最城外へ行てる、ものよて
城下地方よても稍其趣は異なるが如し

櫻嶋大根及土人

櫻嶋にて能く果物を産せり桃柑橘類尤も多く四時共婦人こばらと稱
する一種の竹籠を頭上へ載り城下へ賣り歩むなり其狀圖を示せるが如く
他府縣にて海邊に住し昆布雜魚等を賣り歩むたたの如し然れども此島よ
ては只商事を戴き見るのみからず作物を施す処の人糞肥料等も樽又桶
に納めて頭上へ載り耕作場へ運ぶなり風俗の如くも城下を去る海上僅か
に里餘あるよを拘らず甚だ異風なるものあり

櫻嶋大根も其形他府縣の燕に似て大なるものも貳個を馬の一荷とて運
搬するなり概して此大根も徑一尺以上のものを常とす肌合極細かくして
味等を至つて宜し他府縣よても更に稀なる所のものなり

鹿兒嶋案内

鹿兒嶋市と別圖ニ示せる如き薩摩國東端に位する縣下第一の大都會にして之れを四拾七町三村ニ區劃せし戸數凡九千四百餘人口五萬四千八百餘(男二六、九八〇 女二七、八二〇)市の前面ニ錦江灣内ニ富士かと見まごう櫻島は大胡坐をなし江岳の風雅真趣なる恐らば天下ニ數あらざるべし若し他府縣の人士ニ至らん今聊る市中の光景を寫して其案内ニ便せんとす

鹿兒嶋縣廳と山下町ニありて正面朝日通りの突き當りなり今を去る殆んど二十年以前の建築として周圍ニ石塀を繞らし宛然一城廓の如き庭内の如き頗る清淨にして諸種の樹木を配栽し樹間ニ廣大なる泉水の設けある等甚く幽邃雅致を有せり廳舎の構造も亦規模宏大にして面積凡る四五丁歩餘此構内ニは稅務管理局縣會議事堂警察部等あり共ニ二階建洋館たり

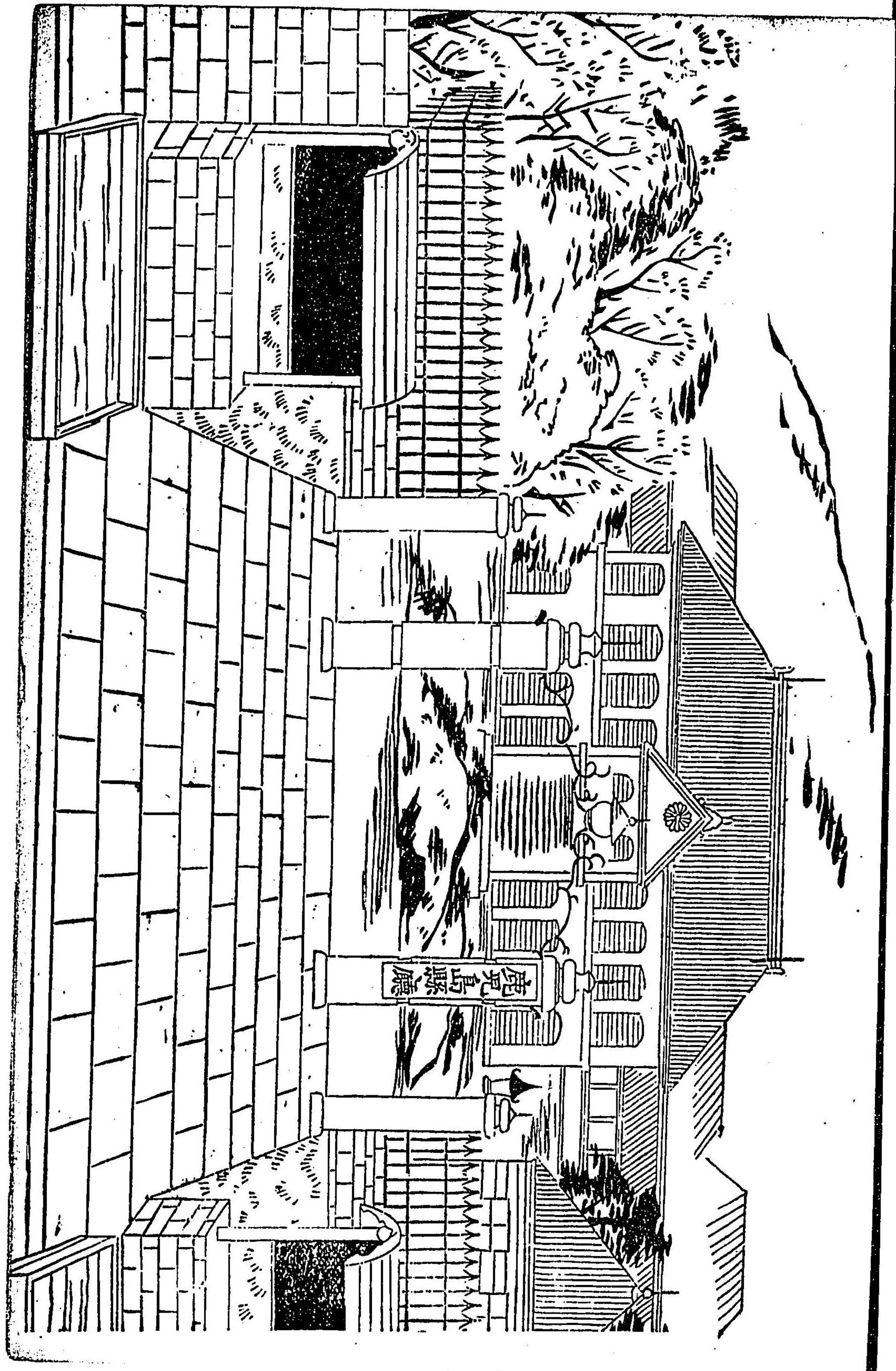
師範學校と縣廳を距る丁餘ニ在り同し山下町國道ニ沿ひ昨夏以來新築ニ着手し目下工事最中なきは遠からず其竣工を見るに至るべし

地方裁判所　と縣廳と門塀を聯ねて西隣より構造頗る壯麗なり然るど
を建築已に舊に屬したるは早晩新築せらるると竣工の　と其並に尙一層
の壯麗を添ゆるなるべし

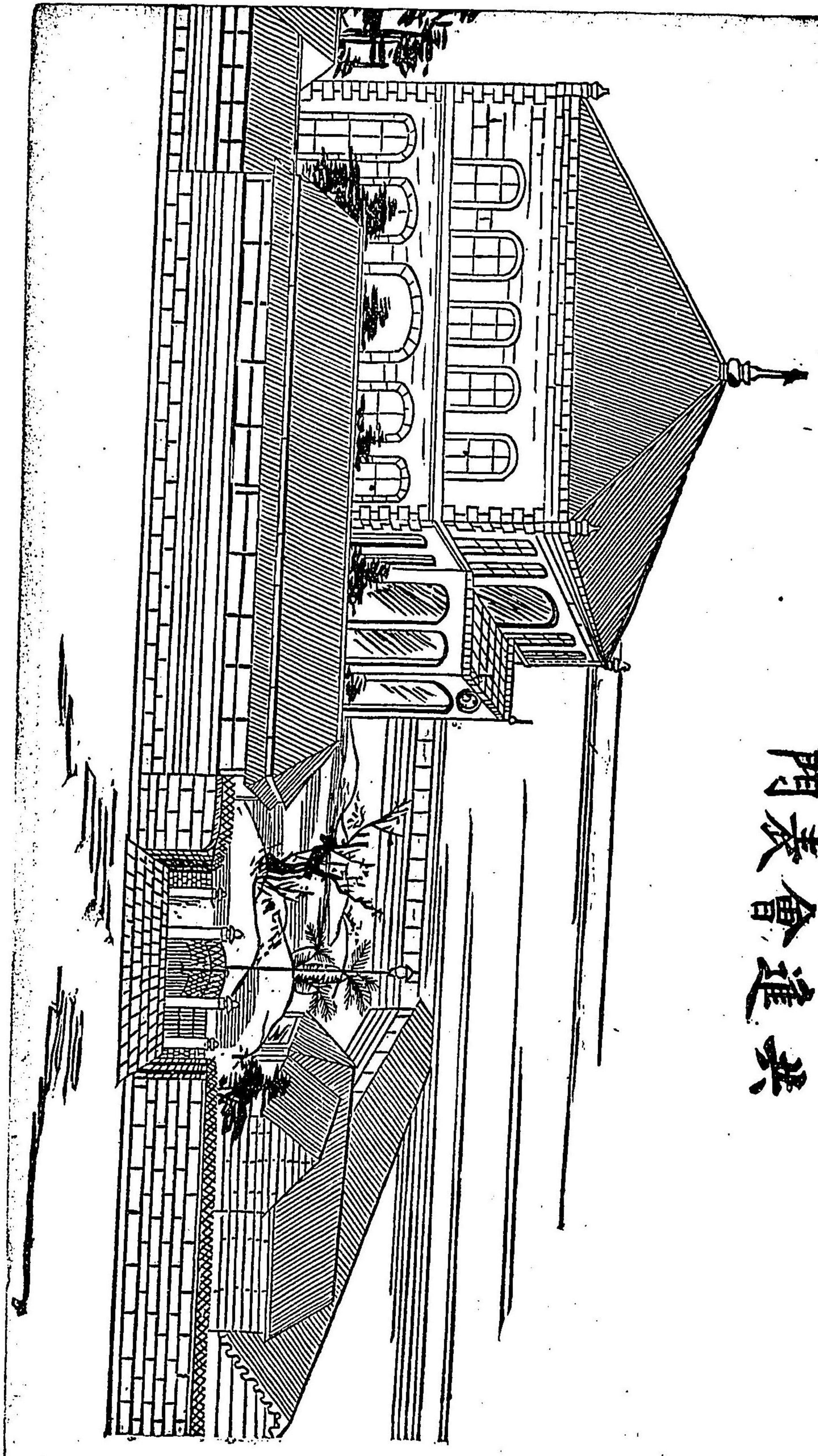
區裁判登記所等全構内より

共進會場　と元興業館より今回開設の第十回九州沖繩八縣共進會場とな
る昨夏以來の改築として規模宏大頗る見るべしものあり場の正門
と二大電燈を点し門前の附近は數多假小屋の設けられ市中の商估
輩の本會を期とし假出張商店も準備したるものにて平常寂寥たるの
通りも本會開設のため俄然一街衢をなせよなと其他市中の光景頗る
人氣振興せり思ふに本會開會の日に至らば更らに一層の繁榮混雜を
極むるに至るべし

照國神社　と共進會場正門の右手なる行き當りの神社なり四十年前以前薩
摩聖人と敬仰せられし順照院殿故從一位島津齋彬公を祠り奉る別
格官幣神社なり近年薩摩出身の各名士及地方有志相圖りて更らる一
大社殿を新築を加ふるに神苑を設きて公園等も宛りるなどの設計企
劃中なれば年を出すまで宏麗善美の大靈場を見るに至るべし此地域



共進會表門



内々昔南照院と稱せし寺院の址あり故に社頭の馬場を俗に南照院馬場或は順聖院馬場と稱せり

西本願寺別院

と御着屋通りより東北に朝日通りを沿ひ院後を即ち

山下町國道なり今をさる七八年以前に起工し明治三十年六月を以て全く其竣工式を行はりと院棟の高さ直立拾八間三尺餘實に全市中第一高大無比の建築にあつて遠く里餘の外に於て院棟の斐たるを知る

御着屋

通より第一に目立たるもの即西本願寺別院にあつて次に石木

造の五階四階三階建宏壯美麗の家屋とす是れ所謂御着屋の料理屋なり別院は小路を隔て、降りせるものを池田屋とかも其西隣なる芳野屋として其正面あるもの之を玉川屋なりとも何れも鯉蒲焼を兼業する各樓大抵藝妓拾數名を抱へ頗る繁昌せり

勤工場

芳野屋に隣りせるもの其誕生第二の勤工場より和洋小間物書籍

陶器細工物反物呉服等總て備へらるるなる尙第一誕辰の勤工場も石燈籠通りもあり商品亦一とあつて備へらるるなく一二共々頗る繁昌する數多の顧客あり

郵便電信局

と縣廳の門前朝日通り角にあつて西本願寺別院側面を對せり

舊と洋館の建物あり、近時通信事務の頻繁なるに加へ、臺灣沖繩に至るの電信事務をも管掌すること、かりしとて、應舎の狹隘を感し、三十一年度夏とり之を新築し着手し、石造に改築せるとなれば、竣工の上、一層其美觀となるへし

左記の箇所、假事務を取扱ふ

一 假郵便局と築町錦江橋(野上橋)側あり

一 電信局は舊鹿兒島ホテル跡、廣口あり

鹿兒島新聞社、廣口あり、舊日本造建築として、宏壯美麗と云ふべし、らざりしが、幾たび鹿兒島毎日新聞社と合併し、且つ社會の進運に伴ひ、目下發行の紙數、れ如き殆んど一万余垂々なるに際し、諸器械を改造、其他より、社屋の狹隘を告げ、當時新築中かれば、竣成の後、益々其美麗を加ふなるべし

鹿兒島電氣株式會社

を同く廣口ありて、鹿兒島新聞社と一の大路を

隔て、相門せり、明治三十年八月新築落成、三十二年六月より、小山田(此地より西)水力發電所の電氣を市中各所に配電、夜に至ると社前なる電氣燈を点し、其附近に夜尙は晝の如く爲り、鹿兒島市中一大

光景を添へ、と蓋し、少しとせざるなり

鹿兒島授産場、縣廳より國道を東へ行く、と數丁餘の処より右折せられ、廣大なる石堀に圍める邸宅あり、正門にて鹿兒島授産學校と標示せり、之を即ち授産場なり、本場の主なる産製物、煙草、織物、蠶糸の三業とし、就中煙草織物等、最も品質善良として、他府縣に輸出せざるを、甚だ夥し

市立商業學校

授産場脇、名山橋を渡り、右折して、尙左に廻り、江戶橋より出

づるに、途中左側ありて、學科程度、れ如く尋常中學相當のを、れたる校

舎は、近時の建築、成り頗る宏壯なり

不斷光院

を名山橋を越へ、左折せ、と數十歩高大の黒門あり、門内より一

の伽藍、聳ゆ之を、即ち不斷光院とて、淨土宗の道場あり、又堀内より小

高に樓台あり、彼れ日夜全市中、時間を報する鐘打樓なり

女子徒弟學校

全し、易居町あり、學科を主として、織物、裁縫、工藝品、禮式

等、かり生徒の數頗る多く、縣下、れ女學校と名を負ふものなり

造土館

を城山の麓、東方あり、舊城址に於て四方共、高大無比の石堀を

繞ら、前面より深き濠を設け、花崗石に成れる美麗の石橋を架き、此を

即ち尋常中學造士館あり

尋常中學校は舊練兵場跡あり校舎最も壯麗宏麗なり市立病院に相對せり生徒頗る多く敷地又大に廣し

市立鹿兒島病院も尋常中學校と對せり地面道並より稍高く奥床しく見受まらる周圍も舊藩在來の石塀を以て繞らる庭内に古松綠樹のまばらに茂るて空氣甚だ清潔なり近來内外眼科専門の學士博士等を聘し頗る良院の稱あり

岩崎谷洞穴は市立病院を去る四五丁にありて岩崎谷の洞穴あり之を即ち明治十年の晩秋九月二十四日西南軍破きて西郷南州翁は此洞穴に籠り奮戦死守して遂に茲に自盡せらるる舊址とせ

鹿兒島大林區署も長田町に在り舊民有邸宅なりしも全署創設以來種々改築せらるる一に廳舎をなせ外觀稍や古く美麗を云ふ程にあらざるも屋内の構造等に至つては頗る見るべきものあり

鹿兒島葉煙草專賣所も全ち長田町ありて國道に沿ふ最近の建物とて頗る宏壯なり敷地は舊琉球館跡にて四周皆在來の石塀を用ひ殆んど一城廓の如し

淨光明寺

縣廳より東國道に沿ひ七八丁にして巡查派出所あり即ち堅馬場入口なり全所より左折し殆んど四五町一の小路を左に直行せば行記當り數拾層の石塀に達す此を淨光明寺あり此寺内にも彼の有名なる西南の役録々の名を天下に轟かしむる西郷南州翁以下各勇將饒士の靈魂を祀せる墳墓あり一と度此に詣りしを轉た感發せる死諸士の墓標疊々を見るを當時戰況の如何ありしを轉た感發せるもの其を多からん又憂に東京上野公園内に建設の南州翁銅像模型を請ひて有志者相圖り同像設置のたり茲に起工中なれば眺望等も頗る宜しく全市の光景坐ながら一目に内を收むべく鹿城に到るものと必し吟杖を曳く趣き好靈地なり

田の浦も東國道に沿ひて祇園の洲に至り尙一轉をて數軒の茶屋料理屋あり何れも山水は風景に富む柳下亭柴山亭池田屋支店(御着屋池田)等なり尙一二丁を東行せば右側行當り風景樓と榜示せる処あるを見ん其附近を田の浦と云ひ鹿兒島八景に一あり薩隅は風景を悉く此地に集る彼の名を負ふ潮音院脚も亦此地にあり尙此所も田の浦陶器製

造所ありて頗る良品を産出せり

磯御邸 田の浦を踏み切て八九丁餘の處道の左側石造宏大の建物ありて烟突の高を聳ゆるものと即ち我國紡績の嚆矢なる鹿兒島紡績所あり此より引續き山に沿ふて敷丁は長蛇を連ざる石塀の大邸宅あり即ち舊藩主島津公の御邸と云ふ之を磯御邸と稱し尙ほ東國道を辿らば彼れ有名なる西郷南州僧月照等の海に投せし場所並に心岳寺ありるへ也

築地花街 祇園の洲に連りて稍西に當る一街なり明治二十二年の創置と云ふ當時は四五軒の微々たること共此國の風儀を嚴格ふるゝめ客足稀に甲樓傾き乙樓起るが如く千變万化は状態なりと云ふ近時社會の進化に伴ひ他府縣人れ往來出入多く船舶の交通頻繁を加ふるに至り頗る繁昌を來し拾有數樓の大度高樓聳へ妓數殆んど三百を置くに至る

東本願寺別院 は新町通に在り堂宇の構造頗る高壯と云ふ宛然町中堂棟を聳かきもの此を即ち東本願寺別院なり
南林寺相國寺 共松原町墓畔に在り何れも禪門たり南林寺を曹洞宗

と云ふ相國寺も臨濟宗なり彼の西郷南州翁と薩海を身を投きたる僧月照の墓も相國寺門前より其碑も 靜溪院鏗水清月比丘安政五戊午十一月十六日滅と書せり

大門口 南林寺墓地の東に當り大度高樓に參々五々高く聳ゆるもれ即ち大門口料理亭なり皆相應れ顧客を有し頗る繁昌せり

松原神社 も松原町に在り島津家中興れ英主島津貴久公を祀る一も同社を大中様と云ふ大中公と謚したるに因る社頭も神苑あり梅花數百株を植も満開の際甚だ美觀なり

西郷隆盛 生誕地 共市内加治屋町なり明治二十二年三月二十日當地出身の先輩諸氏及有志の擧むりて其生誕地域を開元一の紀念碑を建設せり兩傑の碑文重野成齋氏の手になり以て英雄の偉績を千古に傳ふ其碑文も

西郷君以文政十年丁亥十二月生於鹿兒島城下下加治屋町此處即君之宅趾也我輩與君同鄉里得其風采德音於見聞之際景仰欽慕不能自止恐歲月之次遺蹟或歸煙滅於是相謀建一碑以傳永遠庶幾後之生長此鄉者有所感發興起焉 大久保甲東の碑文其年月日を異にするのみなき

城山公園

縣の後方屋形馬場を踏み切りて北に二の丸を通過せは同公園
 に至る迄は同地を地域狹隘として稍遺憾なりとあらまを雖も其横長
 さこと敷丁より市に光景は錦江に灣上隅州各地に遠景等一日に
 内は收光得るを頗る眺望絶兒の地なり又同園の内は軒の茶屋あ
 り大弓場あり以て遊樂を取るに足る同園を下りて一の小路を左折を
 きて二軒の青樓あり保養園鶴鳴館と稱ふ共西洋料理業をふす

塾

舎 義塾を二ノ丸内三州義塾及高麗町橋畔に沿ひたる博約義塾を以
 て主たるものにし科程は漢學洋學數理等とあて生徒は數共多く頗
 る盛大なり其他春秋閣以文會等漢學専門に私塾少からを尙學舎と稱
 して生徒の復習所あり各町各地方限り設置せ其組織他府縣に於ける
 夜學校に如く甚だ盛なり

伊敷兵營

この應下千石馬場を経て國道に沿ひ往くこと里餘右方に當り拾
 數棟の洋館石塙にて圍めるものあるを見ん此を即ち歩兵第四拾五聯
 隊兵營なりと明治三十年四月の創設に係り敷地の廣袤實に三萬餘
 坪にして構内は清潔あると且悠遠なること頗る見るへにあり

旅

館 として見るへに甚だ少な一休は旅籠屋に体裁備らま且
 つ客人に接すること甚だ不馴れあり故他府縣の如く同業者の競争を
 なく客引をかく實は香氣のなれたり然れども近時他府縣と交通
 を稍や頻繁となりなると漸く其面目を改めんと旅亭を改築するを
 比多し

1/10/33

全 明治三十二年三月二日印刷
年三月七日發行

定價貳拾錢

鹿兒島縣鹿兒島市東千石町
百四拾九番戶寄留
愛媛縣土族

兼著 出版人 龜岡倉太

全縣全市金生町百六番戶

發行所 永利平

全縣全市金生町拾四番戶

印刷者 伊澤常吉

全縣全市中町

大賣捌所 吉田書店

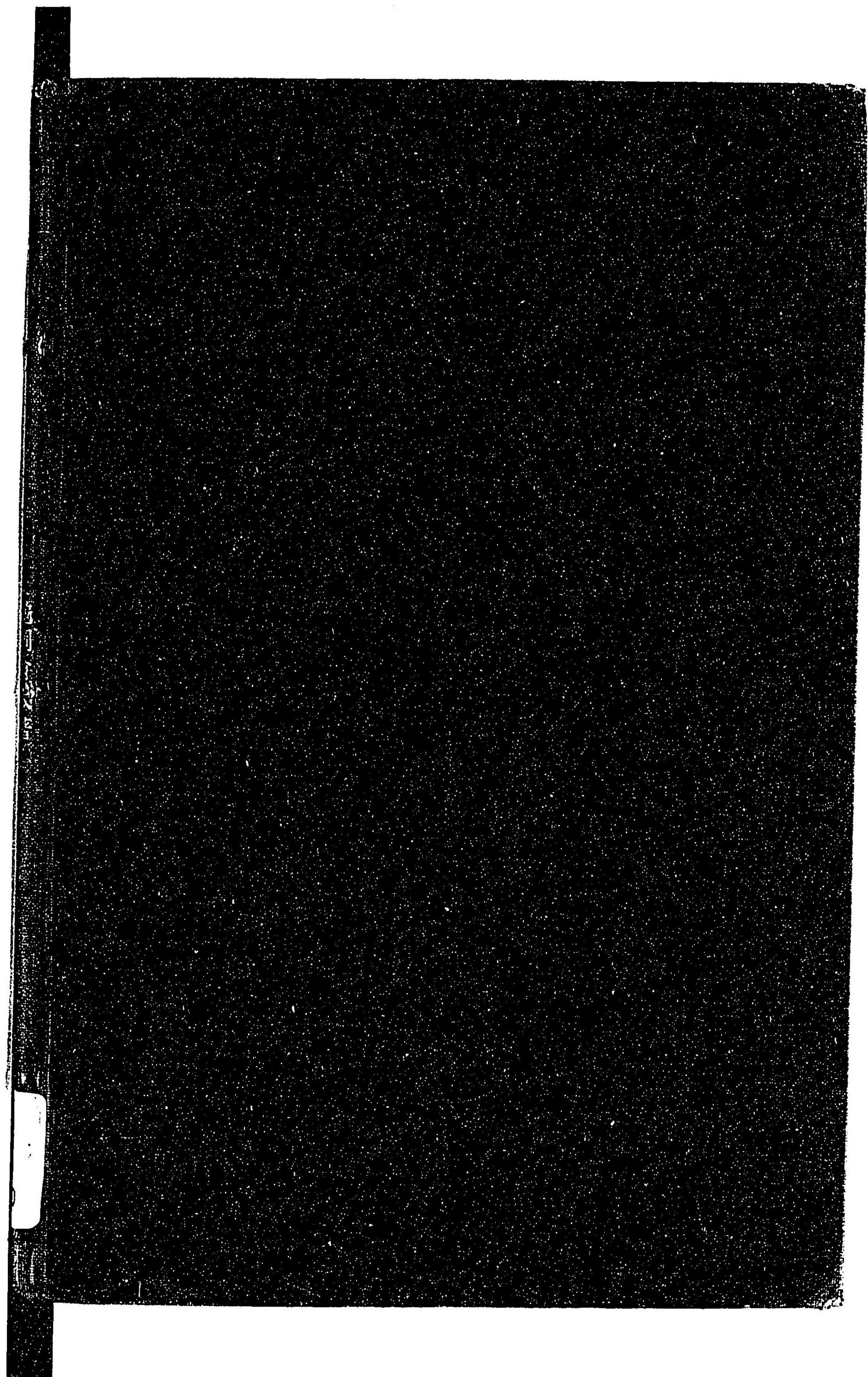
全縣全市中町

大賣捌所 谷村書店

全縣全市松山通

大賣捌所 金光堂書店

87
190



81
190

026218-000-3

81-190

薩摩土産

龜岡 南湯(倉太) / 著

M32

ADC-3913



